

世界が尊敬した日本人⑤

パリ画壇の寵児となった藤田嗣治

前坂 俊之

(静岡県立大学国際関係学部教授)

明治以降の日本の画家で世界的な巨匠になった筆頭は何といても藤田嗣治である。一九二〇年代、エコール・ド・パリを代表する画家として、パリ画壇の寵児となった藤田は帰国し、第二次世界大戦中には数多くの戦争画を描いたが、戦後、これが日本画壇から問題視され日本を去った。フランスに帰化、カトリックの洗礼を受けたレオナルド・フジタは、晩年は聖堂の壁画などの最後の大作を手がけた『パリの画家』として亡くなった。

明治二年(1886)、軍医の息子として生まれた藤田は東京美術学校(現・東京芸大)を卒業して、大正二年(1913)、二十七歳で渡仏した。翌年、第一次世界大戦が勃発、戦時下のパリ・モンマルトルなどで貧乏とアルバイトに追われながら、独自の画業を追究した。

世界中から集まった新進の画家たち、いわゆるパリの異邦人画家集団「エコール・ド・パリ」のピカソ、キスリング、バスキン、シャガール、バン・ドンゲン、モジリアーニ、スーチンらと交友を深めた。「エコール・ド・パリ」は世界の美術運動の中心となった。

『パリに来て一流になるには女道楽をして、酒場に入りびたりで、人生の裏の裏まで知らんや・』という藤田は、トレードマークのおかっぱ頭にロイドメガネに、チャップリンひげに耳飾り、手製の派手な服を着て、毎晩乱痴気騒ぎの画家たちのパーティーにあらわれては顔を売って人気者になる。

藤田は酒は飲めないが、余興の名人で突然、ふんどし姿で「アラ、エッサッサー」と、皿を持って“ドジョウスクイ”を踊り出したり、厚化粧の女装して現れたり、石黒敬七と柔道ショーをやったり毎回その奇行で、『フーフー(おばかさん)』と面白がられた。

ただし夜中十二時をまわるといつの間にか騒ぎから抜け出して家に帰り、夜の明けるまで一日に十四時間も絵筆をとって技法を磨いた、という。

苦節七年、モンパルナスの女王キキをモデルにした「裸のマヤ」ばりの雪のような白い肌の美しい裸婦の大作が完成、パリ画壇で最も権威のあるサロン・ドートンヌに出品した。

カンバスは日本画のような乳白色の地色、その上に日本の面相筆で黒い輪郭線が引かれ、裸婦を浮かび上げる。これまでの油絵には全くない透明の質感に、批評家は「すばらしい白地」と絶賛した。油絵に水彩画の技法を融合させ『繊細な人肌を再現した』この白地はフジタ・マジックと呼ばれた。

大正11年(1922)にはサロン・ドートンヌ審査員になり、「女と猫」「オカッパのジャポネ」は一躍、パリ画壇の寵児となった。『パリでは日本人と見ると、どこでもフジタ、フジタと呼ばれるほどの大変な人気ぶり』と当時を画家・荻須高德は回想する。一四年にはフランスで最も権威のあるレジオン・ドヌール勲章も獲得した。ピカソ、モジリアーニと並ぶエコール・ド・パリの巨匠としての地位を不動にした。

昭和四年(一九二九)、十七年ぶりに帰国した藤田は中南米、南アメリカ、中国など世界を旅行して裸婦中心から風景画、戦争画と作風は一層円熟味を増した。第二次世界大戦中には陸、海軍の囑託として戦地を訪れノモンハンでは「ハルハ河畔之戦闘」、「アツ玉砕」「血戦ガダルカナル」『サイパン島同胞臣節を全うす』などの戦意を昂揚させる戦争画の大作を次々にものにして『聖戦美術の巨匠』となった。

敗戦、一転する。日本画壇では戦争責任論議が噴出する。画家たちはGHQから戦争責任を追及されるのではないかと戦々恐々とし、藤田を最大の戦犯とみなした。親しかった仲間が次々と藤田から去っていった。しかし、昭和二二年(一九四七)二月にGHQが発表した戦争犯罪者リストには画家は一人も入っていなかった。

あらぬ容疑やウワサはこれで晴れたが、藤田の受けた心の傷、不信感は癒えなかった。日本画壇の狭く、陰湿な人間関係にすっかりイヤ気がさし、昭和二十四年、二度と故国に帰らぬつもりでフランスへ旅立った。空港での記者会見で、「絵かきは絵だけ描いてほしい。仲間喧嘩をしないでほしい、もっと国際人となって」と語った。

昭和30年、69歳でフランスに帰化した藤田は子供や聖母マリアや宗教画を描くことが多くなった。78歳でカトリックの洗礼を受けて尊敬するレオナルド・ダビンチにちなんでレオナルド・フジタと改名したのにはフランス人も驚いたが、パリの画家として終えたいと思ったのである。

ランスの礼拝堂(通称・シャペル・フジタ)の内部のフレスコ画の制作を最後の仕事に取り組んで、昭和四三年(一九六八)一月、八十一歳で亡くなった。